

しめのひとこと

志免町のいろんなひと、いろんなことをお伝えします！

13 志免祭をもっと
浸透させたい
10年目の現在地

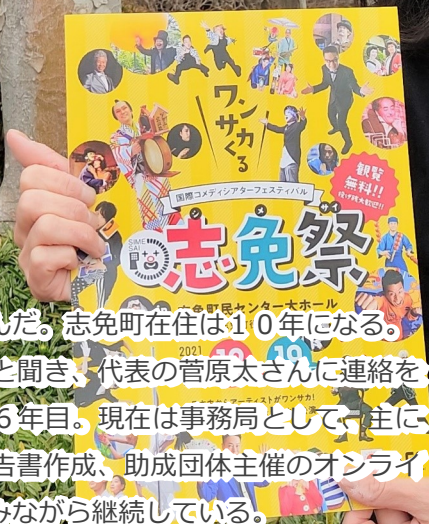
たかむら

きょうこ

高村 京子

シメサイ実行委員会事務局

熊本県出身。進学時に福岡市へ移り住んだ。志免町在住は10年になる。「志免祭」でお手伝いを募集していると聞き、代表の菅原太さんに連絡をしたことがきっかけでメンバーになり6年目。現在は事務局として、主に「助成金申請」を担当し、申請書や報告書作成、助成団体主催のオンライン報告会などを経験。団体活動を楽しみながら継続している。



親子で志免祭に感動。

きっかけは情報収集から

生まれと育ちは熊本県です。進学で福岡市東区にきて、結婚してしばらく東区に住んでいました。

子どもが生まれた後、公民館の子育てサークルに参加して、その際に「福岡東部子ども劇場」を知り、入会しました。今まで演劇などに特に触れてこなかったのが、親子で楽しめることがわかり、演劇やパフォーマンスが好きになりました。志免町に引っ越しましたが、東区が拠点のまま暮らしていたため、シーメイトには遊びに行っても、豎坑櫓は「何だろう」と思うだけ、志免町の中のことや歴史についても、まったく知らずに過ごしていました。

あるとき友だちから「志免祭」のチラシをもらい、ふらっと行ってみたらすごく感動したのです。シーメイト以外のあの辺りのことも知らずに行ったので、炭鉱町の昔ながらの街並みや、細い路地の向こうに空き地があって、大道芸が行われている様子に感動しました。その時に、大道芸も初めて見ましたし、町の中でこんなイベントができるなんて「志

免町ってすごい町だ！」と強烈に印象に残りました。その後、個人的に志免祭や志免町のことについて、主にSNSを使って情報収集をし始めました。

その頃、今のシメサイ実行委員会の代表、菅原太さんがFacebookで団体の人手不足を頻繁に発信していたのです。志免祭にも興味があつたし、「人手不足で志免祭がなくなったらもったいない」という想いで団体の動きを確認していると、お手伝い募集が目にとまりました。「できることがあるなら」と自分から連絡を取りました。最初は団体のコアメンバーが揃う話し合いの場に参加しました。

そのころは興味のある方は即メンバーになってください！という感じでした。今から5～6年前のことです。

シメサイ実行委員会とは

毎年4月に豎坑櫓のふもと、大正町商店街界隈にて、全国からトップパフォーマーを集めて「志免祭」国際コメディフェスティバルを開催し、地域の活性化を目指し、志免町を町内外に広くアピールすることを目的に活動している団体です。



12月の公演ではグッズ販売も好評でした！



事務局メンバーは、得意を活かした分担を実現。継続の原動力に！

私は後援の申請や、ここ数年ずっと助成いただいているYS市庭コミュニティー財団を主に担当しています。事務局は私を含めて5名で分業しています。パフォーマーとのやり取りは代表の菅原さんが担当し、ボランティアさんや地元団体との調整、出店者関係の調整など、それぞれの内容を把握している人が得意を活かして分担しています。



WEB会議を活用中。 志免祭をもっと浸透させるには

団体は、事務局5名と、実行委員18名で構成されています。コロナ禍をきっかけに、WEB会議を活用していました。会議で必要なことを話し合い、志免祭開催までの会議録をFacebookに掲載し、実行委員に共有しています。集まるための移動時間が省けるので、会議への参加しやすさにつながりますし、情報共有もスムーズです。

令和3年12月に開催した「志免祭」と同時に、志免東小学校（例年志免祭を開催してきた大正町商店街界隈を含む校区の小学校）で学校公演が実現しました。チラシを町内の全ての小中学校で配り、町の広報誌と一緒に全戸配布もしましたが、東小校区から離れた地区からのお申込みは少なく、志免町内での認知度はまだまだ低いと感じています。

小学校での公演は、志免町の住民への広報効果が高いと考え、ほかの小学校でも開催したいです。まず、子どもたちに知らしてもらえれば、志免町内での志免祭の認知度が上がると考えるからです。大道芸が好きな方など、リピーターを町外から多く獲得

できています。また、ボランティアとして団体や個人で継続して参加して下さっている方がいます。12月の公演では、志免東中の生徒も参加してくれました。今後も近隣の小・中・高校に、団体や志免祭について丁寧に広報していきたいです。団体を継続していくため、活動を見せて、多くの人に知ってもらおう。その先には、作る側に参加する人が増えると理想ですね。



人との縁を大切に、楽しみを作り出す。活動を続けるために。

志免町でこれをやりたい！と思う人同士が、知り合って企画したり、話し合ったりできる場があるといいですね。そこには行政の協力体制などにも期待したいです。志免祭もそうですが、イベント実現には、町の複数の担当課と話す必要があり、困難にぶつかったら一緒に考えてくれる、知恵を借りられるような体制があると、実現につながると思います。

現在団体では、人とのつながりを大切にしながら次の志免祭の開催方法を模索しています。大人が本気で楽しんで続けていたら、子どもたちも参加してくれるかなと感じます。志免祭が、校区をこえた子どもたち同士のつながりが生まれる居場所になって、その子たちにゆくゆくは志免祭を託していけたら、こんなにうれしいことはないですね！



取材を終えて

興味を持って自ら参加して続けてきた活動が、高村さんの新たな居場所になっていました。活動継続のために、人のつながりを大切にして、協力を得ながら新たな挑戦を続けている様子が伝わりました。

